同志社大学 良心学研究センター主催 公開シンポジウム

良心教育を世界に

―― 良心教育の起源と挑戦 ――

新島襄は良心や道徳を大切にし、それらに基礎づけられた近代教育を目指しました。そして新島の感化を受けた人々の中からは、それぞれの時代と場所において「地の塩」となった良心の実践者たちが輩出されてきました。このシンポジウムでは、新島の思想を広く近代史の中に位置づけ、その意義を再確認すると共に、そこから現代に投げかけられた課題を抽出していきます。日本社会では、道徳はしばしば「国民道徳」として理解されてきましたが、本シンポジウムでは、世界につながる道徳（良心）の普遍的次元を探求していきます。

- 日時：2015 年 11 月 11 日（水）16:40 - 18:30
- 場所：同志社大学 今出川キャンパス 同志社礼拝堂
- 講演：沖田行司（同志社大学 社会学部 教授）

司会：小原 克博（同志社大学 神学部 教授、良心学研究センター長）
コメンテーター：北 寿郎（同志社大学大学院 ビジネス研究科 教授）
Idiris Danismaz（同志社大学 高等研究教育機構 特定任用研究員）

良心を世界に―良心を覚醒させる知の連携と知の実践

CONSCIENCE 同志社大学 良心学研究センター

http://ryoshin.doshisha.ac.jp

講師 略歴

沖田 行司（おきた・ゆくじ）

1948 年京都府生まれ。同志社大学 社会学部教授。専門：日本思想史・日本教育文化史。博士（文化史学）論博。

1979 年 3 月、同志社大学大学院文学研究科文化史学専攻博士後期課程満期退学。1979 年 4 月、同志社大学文学部助手、専任講師、助教授を経て、1990 年 4 月に文学部教授となり、改組転換で 2005 年に社会学部教授。ハワイ大学日本研究所客員研究員（1989～1990）、中国人民大学客座教授（2003～2013）。

単著：『日本人をつくった教育』2000 年、大巧社。『新訂版　日本近代教育の思想史研究』2007 年、学術出版会。『藩校・私塾の思想と教育』2011 年、日本武道館。編著：『教育社会史』（新体系日本史 16）2002 年、山川出版。『人物で見る日本の教育』2012 年、ミネルヴァ書房。共著：『応用倫理学講義　6 教育』2005 年、岩波書店。『近代東アジアの経済倫理とその実践』2009 年、日本経済評論社。『横井小楠：公共する人間』2010 年、東京大学出版。『正義とは』2012 年、岩波書店。『知るとは』2012 年、岩波書店。

良心教育を世界に――良心教育の起源と挑戦

社会学部教授　沖田行司

要　旨

「良心」と言う言葉が日本において定着してゆく思想史的な背景を辿り、新島が「国民道徳」ではなく何故「良心」教育を主張するに至ったかを考えてみたい。日本の近代史において、国家が徳育を重視した時期が幾度かある。同志社が設立されてまもない１８８０年代頃、明治政府内部で徳育に関する論争が行われた。天皇の側近である元田永孚と開明政策を主張する伊藤博文らの開明官僚との論争は有名である。元田らは天皇を中心とした復古の体制を再確認するとともに、行き過ぎた文明開化の是正を求めた。これに対して、伊藤らは富国強兵の基盤である殖産興業を推進しながら近代的な立憲体制の確立を主張した。

儒教主義の復活を否定した伊藤博文ではあったが、自由民権運動の拡大が反政府運動に繋がることを恐れた政府は「修身」教育を諸科目の首位に置き、やがて帝国憲法の発布の翌年に「教育に関する勅語」(「教育勅語」) を煥発した。これによって「宗教と教育の衝突」論争が引き起こされ、キリスト教排撃運動が激化したことは周知のとおりである。新島は教育勅語の煥発を待たずにこの世を去るが、このような歴史状況の中で、新島が考えた教育理念は元田らの徳育優先ではなく、また伊藤らの知育優先でもなかった。新島は「良心教育」を主張することによって、日本のもう一つの「近代」を構想した。そして、新島の志を継承した人々が、国家の権力に抵抗する思想や教育理念として守ってきたのが良心教育に他ならなかった。それでは、新島が教育の基本にすえた良心教育とは何であったのか。日本の近代思想史の文脈で考えたい。

さらに、道徳教育の強化が叫ばれ、２０１８年からは道徳教育の教科化が実施される。たしかに、教育現場では様々な矛盾が現れ、いじめや殺人にまで及んだ事件が頻発し、子ども達の心の荒んだ状況が見てとれる。このような状況で、道徳教育が国民道徳から国家道徳へと向かう危険性も孕んでいる。良心教育を基本に据える同志社教育の現在的な役割と課題とは何かを併せて考えることも本日の課題である。

１．東洋思想と「良心」

・『孟子』の良心説　　斉の国の牛山の例え（『孟子』告子章句上）

「人に存する者といえども、豈仁義の心無からんや。其れ其の良心を放つ所以のもの亦猶斧斤の木におけるが如きなり」

・仁義の心＝良心　　仁→人を慈しみ愛する心　義→事の道理に適う心

２．「良知」〈陽明学〉と「良心」

・心の声→良知　　知行合一・事上磨練・万物一体の仁

・幕末明治のキリスト者は陽明学を学んだものが多い〈山路愛山〉

３．青年を抑圧する封建体制➡反逆する「青年」新島襄

・「勉強時代」の出現　　蘭学から儒学　→階層上昇の希望　　１４歳の挫折

・禁制の読書→　漢訳聖書等

・新藩主に対する忠誠意識の喪失→武士が忠誠心を失うこと

・脱国

【個の確立〈明治期の青年の課題の先取り〉→キリスト教との出会い】

・岩倉欧米使節団の田中不二麿文部理事官に対して「自由な日本市民」

・国家に対する不信→「私」の確立　　「私立」する個人

・幕末動乱の時期に「国家のために一命をかける英雄」というフィクション

　国家主義の台頭のなかでキリスト教主義学校同志社を守るためのロジック（徳富蘇峰）

・むしろ青年が持つ不安と希望とに正直に向き合った新島像

４．徳育論争

・1879 年「教学大旨」（元田永孚）VS「教育議」（伊藤博文）

・1879 年　同志社における智徳論争　「智は徳に勝る」（徳富蘇峰・大久保真次郎）

・大西祝「宗教心なくんば遂に道徳を如何。天下また宗教の外に徳義の基礎を置くべき者あらんや。（中略）茲に一の良心といふ者あり。然れ共是れまた神の念を去る時は甚だ正確ならざるものと」（『哲学会雑誌』23 号 1888 年）

・原田助「即ち良心は選択に於いて正義を知覚し、且つ義務を感覚するものなり」（「良心の本源」（『六合雑誌』1888 年）

　教育や習慣において生じたものではなく、客観的な圧力（権力主義）は良心に馴染まない。「良心の権威」➡キリスト教信仰

５．良心教育と愛人主義　→国際主義

・国民道徳➡国家道徳➡愛国心

・良心教育＝愛人主義➡国際主義

　国家や民族を超えて世界に繋がる→新島の考えた国際主義（グローバリズム）

・愛国よりも愛人

「己一国をを愛し何事も一国の為に止まりて、兎角愛国より偏頗の心生じ、我が日本を愛して外国人を敵視するの憂いなき」

「吾人、愛人主義を論ず。吾人今より愛人を主張、これを全国に波及せしむ」

結び

当時の徳育論が国民道徳・国家道徳の枠に閉じ込められてゆくのに対して、新島の良心教育は愛人主義に裏付けられることによって、国家や民族を超えてゆくベクトルを有していた。